

土曜

ASHUREY CLASS

原文で味わう詩篇23篇

תהלים

No.4 2025. 12. 13

1. テキスト

24

「いまだ」なされていない栄光の王、
すなわち再臨のキリストの到来の預言

23

復活によってもたらされた「いのちを与える霊」、
すなわち「霊の中に生きること」の喜びが綴られ
預言されています。

22

イエシュアの受難
と死と復活の預言

1. 全体のテキスト

【新改訳2017】 詩篇23篇 ダビデの賛歌

- 1 主は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません。
- 2 主は私を緑の牧場に伏させ いこいのみぎわに伴われます。
- 3 **主は私のたましいを生き返らせ**
御名のゆえに 私を義の道に導かれます。
- 4 たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわざを恐れません。
あなたが ともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖 それが私の慰めです。
- 5 私の敵をよそに あなたは私の前に食卓を整え
頭に香油を注いでくださいます。私の杯は あふれています。
- 6 まことに 私のいのちの日の限り
いつくしみと恵みが 私を追って来るでしょう。
私はいつまでも 主の家に住みます。

2. 「人称」①

【新改訳2017】詩篇23篇　　ダビデの賛歌

- 1 主は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません。
- 2 主は私を緑の牧場に伏させ　いこいのみぎわに伴われます。
- 3 主は私のたましいを生き返らせ
御名のゆえに　私を義の道に導かれます。
- 4 たとえ　死の陰の谷を歩むとしても　私はわざわざいを恐れません。
あなたが　ともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖　それが私の慰めです。
- 5 私の敵をよそに　あなたは私の前に食卓を整え
頭に香油を注いでくださいます。私の杯は　あふれています。
- 6 まことに　私のいのちの日の限り
いつくしみと恵みが　私を追って来るでしょう。
私はいつまでも　主の家に住みます。

2. 「人称」 ②

●詩篇23篇は「主」と「私」という人称しかありません。4～5節では「主」が「あなた」に置き換えられています。この詩篇は「主と私のかかわり」を語っている詩篇です。

●ところで、ここにある「私」とは誰のことを指しているのでしょうか。表題にはダビデによるとありますから、ダビデだと思ってしまいます。詩篇の多くはダビデによるものですが、イエシュアはダビデよりも前におられる先取的な存在です。つまり、ダビデはイエシュアを証しするために存在させられているという前提で見ると、この視点は「御父と御子のかかわり」を歌った詩篇と見ることができます。その御子は「人となられたイエシュア」です。そのかかわりの中に、私たちをも招かれています。

3. 今回のテキストと語彙

●今回取り上げるのは、3節前半です。

「**主は私のたましいを生き返らせ**」という預言です。

岩波訳 「わが魂をかかれは**回復させ**」

回復訳 「彼はわたしの魂を**回復し**」

NKJV He **restores** my soul

NTB He **renews** life within me

Moff He **revives** life in me

Hebrew **נִפְשִׁי יְשׁוּב** / **יְשׁוּב** は、**בִּשׁוּב**の未完了ピエル態。

彼は回復させる 私の魂を

3. 語彙「たましい」①

イエショーヴェーヴ

יֵשׁוּעַ

彼は回復させる

ナフシー

נַפְשִׁי

私の魂を

- 「彼」とは「主」のことです。
- 「たましい」と訳された原語は「ネフェシュ」(נַפְשִׁי)です。

英語では my soul / my heart / my life / my glory / my honor / me (myself)などと訳されています。

- ここでは、人となられたイエシュアが存在、イエシュアの心を意味します。

3. 語彙「たましい」②

● **ネフェシュ**(נֶפֶשׁ)は「渇き、渴望」を持った人間存在全体を表します。

① 42篇1節「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、

神よ、私の**たましい**はあなたを慕いあえぎます。」

② 同2節「私の**たましい**は、神を活ける神を求めて渇いています。」

③ 62篇1節「私の**たましい**は、黙って、ただ神を待ち望む。」

③ 63篇5節「私の**たましい**が・・満ち足りるかのように、

私のくちびるは喜びにあふれてあなたを賛美します。」

④ 同8節「私の**たましい**はあなたにすぎります。」

● いずれも「ネフェシュ」である人間は、渇きをもって神に対峙する存在です。神によって満たされなければ真に生きることのできない、そのような存在こそ「ネフェシュ」なのです。まさにヘブル語独特の意味を内包する言葉と言えます。

4. 語彙「回復させる」①

- 「回復させる」 **revive, restore, renew, give new strength** と訳されたヘブル語は[シューヴ] (כִּיּוּב) で、本来の意味は「戻る、帰る」で、神に立ち返る、悔い改めることを意味します。
- 「シューヴ」 (כִּיּוּב) は詩篇で34回使われています。その中で **restore** 「**生き返らせ**」と訳しているのは3回(23:3/71:20/85:1,4)のみです。**restore** は「元に戻る、回復する、元気を取り戻す、生き返る、復歸する、再建する、新しい力を得る」といった意味があります。たましいの刷新、更新もここに含まれると思われます。
- 「生き返る」ためには「主の前に静まる」という祈りの生活が必須です。この祈りのライフスタイルを継続、あるいは一新することなしに、豊かないのちに「生き返る」ことはできないのです。

4. 語彙「回復させる」②

【新改訳2017】マルコの福音書1章35節

さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

※「寂しいところ」(エレーモス：ἔρημος)

= 荒れ果てた場所 = 荒野 = ミドゥバール：מִדְּבָר / 神のことばを聞く場所

※「祈っておられた」(プロセウコマイ：προσεύχομαι / לַלְלוּのヒットパエル態/ヒットパツレール：לְלוּתָהּ)

【新改訳2017】ルカの福音書 4章42節

朝になって、イエスは寂しいところに出て行かれた。

※「出て行かれた」の理由・目的である「祈るため」が省略されています。

4. 語彙「回復させる」③

●イエシュアは「朝早く、朝」に祈っています。
イエシュアの「地における務め」において、御父は御霊を無限(無制限)に与えられていました。「御霊」は神の火です。しかしそれだけでは足りないものがあります。その火を消すことがないようにするためには、絶えず「神のことば」という薪をくべる必要があるのです。そのための祈りなのです。

【新改訳2017】ヨハネの福音書3章34節

神が遣わした方(=イエシュア)は、神のことばを語られる。

神が御霊を限りなくお与えになるからである。

●王なる祭司である私たちも、イエシュアと同様に、朝ごとに祭壇の上に薪をくべて、火を絶えず燃え続けさせなければならない、消してはならないのです。

4. 語彙「回復させる」④

- イエシュアの祈った祈りとはどのような祈りだったのでしょうか。それは「とりなしの祈り」というよりは、**御国を見る祈り**ではなかったかと思われます。そのヒントは、イエシュアがやがてイエシュアの友となるべきひとり弟子「ナタナエル」に語ったことばの中にあります。
- 「**見る**」ということばに注目してください。ヨハネの福音書において、このことばはとりわけ重要です。何を見るのかといえ、御国における「神の家」のヴィジョンです。

4. 語彙「回復させる」⑤

【新改訳2017】ヨハネの福音書1章47～51節

47 イエスはナタナエルが自分の方に来るのを**見て**、彼について言われた。

「**見なさい**(ヒンネー：הִנֵּה)。まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。」

48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」

イエスは答えられた。「ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるの**を見ました**。」

49 ナタナエルは答えた。「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」

50 イエスは答えられた。

「あなたがいちじくの木の下にいるの**を見た**、とわたしが言ったから信じるのですか。

それよりも大きなことを、あなたは**見る**ことになります。」

51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。

天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは

見ることになります。」

4. 語彙「回復させる」⑥

● イエシュアはナタナエルに対して「あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました」と言っています。これは預言です。

【新改訳2017】 I 列王記 4章25節

ユダとイスラエルは、ソロモンの治世中、ダンからベエル・シェバに至るまでのどこでも、それぞれ自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下で安心して暮らした。

● 「木の下にいる」とは、神を瞑想する(神に祈る)ことを意味します。

「その日には」(終わりの日には=メシアが来られる時には)、「あなたがたは互いに自分の友を、ぶどうの木の下といちじくの木の下に招きあう」という、まさに全イスラエルが回復するという預言です。現代の時点では想像もできないようなことが、やがてこの地上でなされるのです。

4. 語彙「回復させる」⑦

●この出来事を、イエシュアは「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることになります」と語ったのです。これこそ、イエシュアが日々、自ら見ようとしていたことであり、これを朝早くに起きて「祈っていた」(ヒットパエル)と表現されているのです。イエシュアの関心は常に「神と人がともに住むという神の家」、すなわち「御国のヴィジョン」でした。イエシュアはそれをたとえて語り、奇蹟をもってデモンストレーションされたのです。

●このようにイエシュアの日々の朝の祈りは、詩篇23篇のように、「主は私のたましいを生き返らせる」と言えるのです。王なる祭司とされた私たちのたましいをも生き返らせるのは、御国のヴィジョンに他なりません。これこそが、イエシュアの祈りの太い幹なのです。

今回のまとめ

●オランダの改革派教会が生んだ霊性の大家、アンドリュー・マーレーは「霊的に衰退する原因は、静思の時間をなおざりにするからである」と述べています。主の前に静まるとは、イエシュアと同様に、神を知ること、すなわち神がなそうとしておられるご計画を知ることです。そのためには、日々、朝ごとに、祈りという「神のことばである薪をくべること」です。それは「良い地」を耕す祭司の務めです。今回の詩篇23篇3節前半の「主はわたしのたましいを生き返らせてくださる」、それを日々、経験させてもらえるのです。

イエシヨ-ヴェ-ヴ ナフシー

יְהוָה יִשְׁׁוּב
נַפְשִׁי